はしがき

本書は、私のブログ「小閑雑感」に掲載された文章をまとめた同名の単行本シリーズの９巻目である。収録されているのは 2006 年 11 月から 2007 年２月までに書いた 90 篇で、前著の『Part 8』より１篇だけ多く、332 ページになった。これまでで２番目に多いページ数だが、紙を薄くして部厚くなるのを防いだ。ブログ上にはあっても、本書から省いたものもある。それは「クロスワードを解く」という７回の続き物で、これは別の形で出版した方がいいと考えた。また前著には、ブログになかった写真を 14 点収録したが、今回はブログから写真４点とスケッチ画 11 点を収録した。スケッチ画のうち９点は、ブログのサイドバーに置いた絵のギャラリー「わが町ーー原宿・青山」にある 34 点の中から選んだ。本書に収録してないものに興味がある読者は、そのギャラリーを覗いてほしい。

今回“連続物”として収められている文章には５回や６回続く長いものはなく、すべてが２回で終っている。表題を掲げるとーー「狭い戸口」「神の国」「ネコの実相」「環境意識は向上している」「2006 年を振り返って」「ブレア首相の論文を読む」「“悪を認める”とは？」「わが町ーー原宿・青山」「神武東征の神話考」「環境省は“本筋”を通すべし」である。この中には、別の単行本の文章の元になったものがいくつかあるので、そのことに触れよう。

本シリーズ『Part 5』の「はしがき」にも書いたが、ブログという表現媒体には「とにかく頻繁に書く」という要請があるから、ふと浮かんだアイディアや思いつきを書きとめ、かつその周辺のことを考えつつ文章を書くことが多い。だからブログには、結果的に、ブログ以外の論文や小文には書かないようなことを書くことがある。また、ブログは天下に公開されているから、「日記」のように書き手の専ら個人的な事情を記録するよりは、常に読者を半分意識して主題が決まり、文章に表現されることになる。そういう文章をしばらく書き継いだあとで読み返してみると、何篇かのブログの文章の内容を材料にして、１つのまとまったことが言えるかもしれない、と気づくことがある。こうしてブログは、“発想の揺籃”になりえるのだ。そのことが今回、実際に起こった。

私は 2007 年 11 月下旬に、生長の家から『日時計主義とは何か？』という単行本を上梓させてもらったが、その本の「第一部」には、このブログを“発想の揺籃”としている文章がいくつも収録されている。もっと具体的に言えば、上掲の文章のうち「狭い戸口」（11 月７～８日）「“悪を認める”とは？」（１月 28～29 日）「わが町ーー原宿・青山 (2)」（２月６日）がそれである。さらに「感覚と心」（１月 20 日）と「意味と感覚」（２月８日）も、『日時計主義……』の本の中に一部表現を変えて組み込まれている。このような一見、バ

ラバラの文章が組み合わさってどのような結論に行きつくかに興味のある読者は、ぜひ『日時計主義……』の方も読んでいただきたい。

さて、今年のノーベル平和賞を元アメリカ副大統領のアル・ゴア氏と国連の「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)が共同受賞したことにより、地球環境問題の解決策に世界の関心が一気に集まりだした。本書にはその“前触れ”となった重要な出来事が、いくつか書かれている。それらは、2006 年 10 月末、世界銀行のチーフ・エコノミストだったニコラス・スターン氏がイギリス政府に提出した大部の報告書であり、ゴア氏の映画『不都合な真実』(後にアカデミー賞受賞)の上映であり、2007 年2月初めに出た IPCC の第一作業部会による第４次報告書(IPCC４)である。これらについて、本書では「『スターン報告書』から学ぶ」(11 月 25 日)、「“自然支配”の夢に眠る」(2月４日)、「映画『不都合な真実』」(2月７日)、「IPCC４の予測は“保守的”」(2月 20 日)で取り上げている。この４本の文章を読むだけで、世界の科学者や環境運動家の危機感がどこから来るかが理解できるだろう。それと対照的な日本政府の消極姿勢は、呆れるばかりである。

国際政治が人間の心とどう関係しているかについて関心がある読者には、イギリスのブレア首相(当時)のイスラームについての考え方を知ってほしい。これは「ブレア首相の論文を読む」(1月 14～15 日)という文章で紹介しているが、そこにある明確な「二項対立」の考え方と、アメリカのブッシュ大統領の“悪の枢軸”という考え方の類似性に気がつくだろう。ブッシュ氏の考え方については、「気がかりなブッシュ演説」(1月 12 日)で少し触れている。そして、この２人の指導者が、９・11 後のアフガニスタン侵攻とイラク戦争の主要な決断者であったことを思い出してほしいのである。私はもちろん、オサマ・ビンラディンなどのイスラーム過激派を擁護するつもりは毛頭ない。イスラーム思想の中にも、世界を“平和世界”と“戦争世界”に二分する考え方がある。イスラーム過激派がそういう思想を抱く一方で、それに呼応する善悪対立の思想が米英の指導者層にも存在していたという事実を、読者には知ってほしいのである。生長の家が「悪を認めない」と言うことの意義も、それによって理解が深まると思う。

重い話題から離れよう。本書にはネコに関する文章が４本含まれている。「ネコの実相」(11 月 27、29 日)、「ネコ好きの人に注意！」(2月５日)、「ネコの“魔力”」(2月 17 日)だが、いずれもネコと人間の特殊な関係を扱っている。とりわけ深い話ではないが、ネコ好きの読者から感想を聞きたい気がする。ネコ以外の動物と人間との関係では「鳥と人との共同飛行」(2月 25 日)で書いたように、稀少種の鳥に「渡り」を教える人間の努力は感動的だ。人間は、そういう「無償」ともいえる生類愛を発揮する一方で、ニワトリを含む大量の動物を殺して食肉とし、さらにその処理過程から得られる動物性油脂をバイオ燃料に転換してまで、自動車を走らせようとする。「動物の脂からバイオディーゼル」(1月

７日)で、そのことに触れた。どちらを人間の“本性”と見るかで、人の生き方は変わってくる。生長の家では、もちろん前者の見方をお勧めする。

最後になるが、本書には私の作でない文章が１本含まれている。それは「環境問題の裏に金属問題」(２月 23 日)という題の文章で、書き手は私の仕事上のスタッフで、生長の家総裁室に所属する飯田雅俊氏である。いわゆる「レアメタル」という稀少金属がさらに減少しつつあることについて書いてあるが、重要な話なので、この分野の勉強をする余裕のなかった私に代わって書いてもらった。この場を借りて謝意を表したい。

2007 年 11 月 26 日

谷口　雅宣　拝

Masanobu Taniguchi
電子署名者 : Masanobu Taniguchi
DN: cn=Masanobu Taniguchi, c=JP - 日本, o=SNI International, email=masanobu.taniguchi@nifty.ne.jp
理由 : この文書の著者
日付 : 2007.12.27 17:41:33 +09'00'